

論文 | Articles

ネット型球技におけるサーブ行為に関する現象学的一考察

A Phenomenological consideration on serve behavior
in net type ball games

藪崎 聡

YABUSAKI, Satoshi

尚美学園大学
総合政策学部非常勤講師

Shobi University

2019年3月

Mar.2019

ネット型球技におけるサーブ行為に関する現象学的一考察

A Phenomenological consideration on serve behavior in net type ball games

藪崎 聡

YABUSAKI, Satoshi

[抄録]

日本の文部科学省による、体育における球技の分類は、ゴール型、ネット型、ベースボール型の3種類とされている。

本研究においては、主にネット型球技のプレー開始のための一打目、サーブ技術に着目しそのゲーム構造から本質に迫る目的であったが、考察を進めるうちにサーブと同様の構造を持つ打ち出しが他の分類の種目にも存在することがわかってきた。

サーブ行為は、中世フランスのジュードボームにおいて、元来下級身分の者が貴族や上の身分の者を楽しませる目的で投げられた奉仕的な技術であったことから、「サービス」の名前がついたものであるが、テニスへと移行する長い歴史の流れとともに、さらなる攻防の面白さを求める中で次第にこのサービス技術にも、相手を抑えたり、あるいはプレーの主導権を握る得点源としての要因が含まれるようになってきた。

こうした経緯はもはや周知の事実であるが、ネット型球技以外の分野でもサーブと名がつかなくとも発想においてサーブと同様の背景を有する技術も存在する。

本研究においては、こうした各種目のプレースタイルからプレーの最初がどのような技術で制定されているかを確認しつつ、それぞれの種目の文化的背景やその思想について考察した。

結果として、サーブの名前や、これに類した球出しの技術を今に残す種目は共通的にネットを挟んでボールを打ち合うネット型の種目に大きな影響を与えてきたが、その他の分類に属する、一見かなり異なった種目にもサーブ・第三者による球出しの要素が多分に含まれており、人間が球遊びを楽しむ原点において、この要素は限定された場であることや、その場を支配するルールを受け入れにつながるマインドセットのために、非常に重要な要素であることが考えられる。

キーワード

スポーツ文化、ネット型球技、サーブ、ゲーム開始

[Abstract]

The classification of ball games in physical education by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan is three types of goal type, net type, baseball type.

In this research, I focused on the first game to start playing net-type ball game, technology of

service focusing on the essence of the game structure from the game structure, but as we continue to think, it has the same structure as service that I found out that launch is also in other classification events.

Serve acts are a service-oriented technique originally entrusted by lower classes for the purpose of entertaining people of aristocracy and above-mentioned status in the medieval French Jude Pome, so the name of "service" In the process of a long history of transition to tennis, as we seek fun for further battle, gradually this factor of service also limits the opponent or factors as the score source which holds the initiative of play It began to be included.

Although this background is no longer a well-known fact, there are technologies that have the same background as Serve in ideas even if it is not named Saab even in fields other than net-type ball games.

In this research, we examined the cultural background of each event and its thought, while confirming what kind of technology the beginning of play was enacted from these various play style.

As a result, the name of service and the events that leave technologies similar to this for now, have had a major influence on net type events that commonly involve balls across the net, but belong to other classifications , Seemingly very different events also include elements of balling by serve and third part, and at the origin where humans enjoy ball playing, this element is a limited place and that place is limited It is thought that it is a very important factor for the mind set leading to the acceptance of rules to rule.

Keywords:

sport culture, net type ball games, serve, start of the game

緒 言

現在、文部科学省では学校体育におけるスポーツ種目のうち、球技をゴール型、ネット型、ベースボール型と分類している。⁽¹⁾ ネット型はプレイヤー同士の間にネットが存在し、ゴール型に比較して身体接触が特に少なくなることで、ボールを扱うスキルの重要性が高まる半面で、直接的な筋力などの体力差が勝敗に反映されにくい特徴が強調され、そのことがさらに人気を高めている。

このネット型球技の多くが、「サーブ」という行為によってボール（またはシャトルのように競技における打ち合いの対象）が打ち出されることでスタートする。この共通事項はすでによく知られているところであるが、このサーブという打ち出し行為への文化的考察は、スポーツ史研究の分野ではすでにテニス起源であることが述べられている。

しかし、この行為が持つ文化的意味合い、現象として現れる行為の背景にある思想への哲学的考察などは、実は十分になされないまま、ただ面白さの表層だけをプレイとして実施しているのがスポーツ教育の現状ではないだろうか。

スポーツがその歴史や文化性も含めて価値や意味合いが十分に吟味されて初めて、技術

(1) 学習指導要領

体系やルール制定、変更の今後に向けての方向づけもされていくべきである。

着想の経緯

筆者はかつて、ゴール型球技構造について哲学的考察の結果を研究論文として執筆した。

ゴールという目標対象物にボールを入れる行為が得点につながるという表面的な現象において、攻撃者とゴールの間に存在する防御（ディフェンダー）はその存在も行為も役割すら二次的なものであり、そのゲームにおいて根本的な部分において参加していないのではないかという仮説を設定したが、本来のゴール型球技においては実はゴールの存在自体が二次的なものであり、構造の一次的層に存在していたのは、ボールを争奪するという行為の方であった。

この考察の結果、球技の現象には多くの因子が潜んでいることがわかった。ゴール型と、現状において分類されているからといって、その名称の中に中心となる構造要素があるとは言えないということである。

今回の研究では、ネット型球技の構造を、ゲームの要素の一つであるサーブという行為に着目することで、また新たな一面やこれまで指摘されることのなかった文化的特質や精神を見出せるのではないかと考えた。これが着想の経緯である。

1 サーブの歴史 ジュードポーム

球技におけるサーブ行為の始原は中世のジュードポームに遡る。⁽²⁾

以下に、体育史講義に記されたその文面を引用する。

スポーツの技術用語として「サービス」(service)という言葉を用いているのはテニス、卓球、バドミントン、バレーボールなどである。これらのスポーツ種目のうち、サービスという言葉はスポーツの技術用語として最初に用いたのはテニスであろうと推定される。しかも、そのテニスがまだその前身である「ポーム」(Jeu de paume)と呼ばれていた時代までさかのぼることができるので、およそ13世紀ごろから用いられるようになったと考えることができる。

サービスはもともと「神に仕えること」を意味し、転じて、召使の仕事、奉公、任務、兵役、世話、役立つこと、などを意味するようになり、やがてスポーツ用語としても用いられるようになった。そのきっかけは以下のとおりである。フランスで生まれたポームがイギリスに伝えられ、テニス（今日ではロイヤル・テニス royal tennis またはリアル・テニス real tennis とよび、屋外で行われるローン・テニス lawn tennis と区別している）とよばれる室内対人打球戯として流行したころのサービスは、相対するプレーヤーが行うのではなく、プレーヤー以外の第三者がコートの横（今日の審判台のあるあたり）から手で投げ入れて行った。しかもこの第三者の仕事、つまりサービスは各プレーヤーがつれてきた自分の召し使い (servant) がつとめた。したがって、サービスは文字通り召し使いの仕事であり、主人への奉仕であり、「主人のもっとも打ちやすいボールを投げ入れること」を

(2) 体育史講義 p157

意味していた。⁽³⁾

上記のように、多くのネット型球技における最初の打ち出しは今でもサーブ、サービスとよばれ、その語源はservantによるserviceであったことに由来していた。

実際にこの由来を持っていたのはテニスの前身であるところのジュードポームだけであり、その他の種目で使用されているサーブという用語はその行為も含めて、テニスからの流用であることが推測できる。

2 現在のサーブ事情

しかるに、現在のネット型球技において、第一打であるサービスは完全にこの要素を失っている、というよりは攻撃的に得点を得るための重要な第一打という、新たな意味を持たされている。

名称だけはどの種目でもサービスという呼称が残っているのであるが、実相において全てが攻撃的要素として存在しているため、名称と実態に不一致が生じている。もはや相手に打ちやすい球を出すための奉仕的サービスを用いる種目は存在せず、どのような種目でもレシーブを行う側が打ち返しにくいボール、すなわち自己の得点につながるようなアグレッシブな打球を打ち出すのがサーブの実態である。

現在、サービス、サーブと呼ばれる行為は、実態はファーストアタックと呼ばれるべき技術となっている。その在り方を問う声はなく、その一方でこの呼び方に違和を唱える声もないというのは非常に不可解な現象である。

相手が楽しむ、または相手が気持ちよく打てるために用意されたのではない「サーブ」はいつから変貌し始めたのであろうか。

3 サーブの変化

体育史講義では、サーブの変遷を以下のように説明している。

さらに時代が下がって、ポームやテニスが大衆化し、市民のあいだで大流行した16,17世紀にあっても、サービスを行ったのは球戯館専属の「身分の低い者」であった。彼らはプレイを楽しむ有産市民階級のためにつとめて「サービス」したわけである。

ところで、サービスがいつからプレイをする当事者同士で行われるようになったかは不明である。推測できることは、中世的な身分制度の崩壊と近代市民社会の成立とがその前提条件になったであろうということ程度である。はっきりしていることは、18世紀にはプレイヤーどうしによるサービスが行われていること、しかもレシーバーに有利な本来のサービスが行われていたが、1870年代を境にして、サービスはにわかに攻撃性が加わり、本来の意味を失ってしまうということである。以後、サービスは攻撃のための最先端技術となり、奉仕でもなんでもなし、ひたすら相手をおびやかすための技術を「サービス」とよぶ、用語上の矛盾を生ずることとなった。⁽⁴⁾

(3) 前掲書p157

(4) 体育史講義p158

歴史学においてはこのように、時期は不明であるが、一定の時期を境にサーブが変貌したと、またそれ以前には本来の意味通りのサーブが実施されていた時期が存在していたことを証言している。

ではサービスというプレイの起点としての最初の一打を、哲学的に考察してみる。

4 サービスの哲学

サービスという行為が打球でなく、奉仕の要素をとまなう投げ入れであった時から、その意味はレシーバー側のプレイヤーがそれを心地よく打ち返す行為を呼び起こすためのものであったことがわかる。

原初のサービスは、召使が自分の主人に、より気持ちよく球を打ち、心地よくプレーを楽しめるための球出し、すなわち「サービス行為」であった。そこにあった思想は、まず、ジュードボームの面白みが手のひら、あるいはラケットでボールを心地よく打つということ（行為）に主体が置かれていた、ということである。

召使がサービスを出す。そしてそれを主人であるプレイヤーが打つ。次の段階としてプレイヤー同士が打ち合うという行為にステージが移っていく。

召使がサービスを出している時点ではサービスと打ち合う行為の間にステージの違いが存在する。召使い（サーバー）はプレイヤーではないからである。

これがプレイヤー同士による相手側へのサービス（奉仕的打ち出し）に移行が行われたことで、召使いという存在はコートから消失する。コート内にはプレイヤーのみが存在することで純粋度が増し、プレイヤーの神経はサーブ行為も含めて全てに神経が集中することになる。

ジュードボームはテニスの前身であるが、いくつかの明確な相違点も存在する。コートの構造自体がテニスのような平面のみでなく上部にひさしなどがあり、そこを利用することも技術の範疇にあったため、多面的な打球への反応が要求された。

この後、サーブは技術の高度化、用具、コートの変化、ボール、ルールの変化、ラケットの登場、変化など多くの要因から攻撃性を帯びテニスへと変化していく。

テニスとしての競技化からは勝利を得るための動きが発生しサーブの強度と攻撃力が上がっていく。

この現象全体が変化として表出したことへの透徹した要因は「体育史講義」には明記されていないが、文献上確信を得られるだけの理由を明記した資料が出されていないことによるものであろう。ゆえに推論ではあるがこうしたジュードボームの変化はプレイヤーがより打ち合いを楽しむことに重点を見出した結果であろうと考えられる。スポーツは体を動かし楽しむ時間として存在していたことを考えればより高度な楽しみや興奮を求めて変化につながっていくのは当然の変化と考えられる。

5 ネット球技におけるサービスという「現象」

テニスをはじめとしてバレーボール、バドミントン、卓球、ニュースポーツのインディアカなど現在多数のネット型スポーツ種目が存在する。そしてそのほとんどがサーブと名称のついた一打からゲームが開始される。

この一打がいかなる経緯で現在のような攻撃技術として成立してきたかについては概観

したが、この発祥はゲーム中の攻防には全く関わらない存在が投げ入れたボールであった。実施者はレシーバーについた召使いであったことを考えると、完全に公平な審判的存在とは言い難い。自分の主人がより打ちやすいボールを投げ入れ有利に展開することを期していたことは想像に難くないからである。

とはいえ、プレイヤー同士のサーブに形が変わってから、しばらくの間は、相手に打ちやすいボールがサーブとして打たれていたことになる。この対戦相手に打ちやすいボールを出すことは奉仕であり、文字通りのサービスがその言葉と性質を最も一致させていた時期とも取れる。

言ってみればスポーツ現象と相手への心配りや敬意、フェアプレイやジェントルマンシップに根ざしたスポーツマンシップが最も望ましい形で表現されていた短い時代であるとも言える。

現在、多くの大学で一般教養科目としてネット型球技が、スポーツ実技授業の一環として実施されているがこうした場面で以上のような技術変遷の経緯を文化性の一つとして説明しながらゲームを実施するのも有意義であろうと考えられる。

テニス以外のほとんどのネット型球技もサーブからプレイが始まるが、これは全てジュードボームからテニスで培われた開始様式に倣ったことにより名称が同一になっている。

6 他種目に見られるサーブに似た技術

サーブを行為の表面で判断せず、根本の部分で哲学的に解釈すると、実は他系統の種目にもそれが多数存在していることに気づく。以下で、各種目におけるサーブに類する行為について考察する。

6.1 ゴール型球技

6.1.1. サッカー キックオフ

サッカーはキックオフでゲームや試合が開始されるが、2016年に正式なルール改正が行われるまで前方に蹴り出さなければ有効ではないとされていた。

この方式も元来はまず相手コートの陣地へボールを蹴り出しそこからの攻防が起点となっていたことをうかがわせる。サッカー自体は歴史が長く、ボールを無意味に相手チームに渡さないようにする配慮が早くから始まり、そのため短めの蹴り出しからプレーが始まる形式が長く続いていた。

サッカーにおいてはボールの争奪がゲーム構造上大きな役割を果たすため、サーブのような相手にプレーしやすい状況を演出する要素は少ないが、前方に蹴り出す行為は相手陣地にボールを送る行為に繋がりやすく、実際に相手チームにボールが渡ることを承知の上で前方に大きく蹴り出す戦術も存在している。この場合のキックオフは過渡期のテニスのサーブに類似した行為とも取れる。

プレー開始前にコイントスを行い、攻める方向と、キックオフをするチームを決定する。コイントスに勝ったチームが攻める方向（エンド）を決定し、負けたチームが前半開始時のキックオフを得る。⁽⁵⁾

(5) IFAB サッカー競技ルール p85

以上の規則に注目すると、コイントスに負けたチームがキックオフをする構図であることがわかる。そしてそのキックは2016年までは必ず前方でなければならなかった経緯も存在する。

また、コイントスに勝ったチームが優先的にゴールを選択し、それに対しコイントス敗北側はキックオフを行うという流れも、キックオフされたボールが元来サーブ的な意味合いで前方に蹴り出されたボールであったことを連想させる。

6.1.2 アメリカンフットボール キックオフ

アメリカンフットボールでは、サッカー以上に明確なサーブ式のキックオフが用いられる。

それは守備側チームが前方相手（攻撃側）コートに大きく蹴り出すことが指示されているため、キックオフのボールは明らかに攻撃チームのオフenseプレーヤーに渡る。この行為は形を変えたサーブであり、しかも攻撃性はサーブだとすればテニスのそれよりかなり弱まったものということになる。

以下にNFLの規定を引用する。

キックオフチームのK（キッカー）は自陣35ヤードから相手陣深くを狙ってボールを蹴り、リターンチームはそのキックされたボールをKR（キックオフリターナー）がキャッチして、次のオフenseを少しでも相手陣エンドゾーン近くから開始させようと、陣地回復のためにボールを持って走る。KRがキックオフチームのSP（スペシャルチームプレーヤー）に止められた地点でプレイは終了となり、そこからリターンチームがオフenseを開始する。試合開始時にキックオフを行うか、リターンを行うかの選択は試合前のコイントスによって決定され、後半は試合開始時とは逆のチームがキックオフを行うことで開始される。⁽⁶⁾

6.1.3 バスケットボール ジャンプボール

バスケットボールではジャンプボールからのタップでプレイがスタートする。この際のボールの投げ上げはレフェリーという第三者に委ねられており、この部分を抜き取って構図を考察すればやはりある種のサーブ行為とも見ることが可能である。

以下にJBA 試合規則文中からジャンプボールに関する規定を抜粋した。

12-1 ジャンプボールの定義

12-1-1 ジャンプボールは、第1ピリオドの開始時に、センターサークルで各チーム1人ずつのプレーヤーの間に審判がボールをトスすることで行われる。

12-1-2 ヘルドボールは、両チームの1人あるいはそれ以上のプレーヤーがボールに片手または両手をしっかりとかけて、どちらのプレーヤーも乱暴にしなければ

(6) NFL公式サイト 日本語版 ルール

ればそのボールのコントロールを得られないときに宣せられる。

12-2 ジャンプボールの手順

12-2-1 両ジャンパーは、センターサークルの自チームのバスケットに近い方の半円の中に両足が入るように立ち、片足はセンターラインの近くに置く。

12-2-2 同じチームの2人のプレーヤーがサークルのまわりに隣り合わせて位置したときは、相手チームから要望があれば、一方の位置は譲らなければならない。

12-2-3 審判は、両プレーヤーの間で、両者がジャンプをしても届かない高さまでまっすぐ上にボールをトスする。

12-2-4 ボールが最高点に達した後で、少なくともどちらかのジャンパーによって片手または両手でタップされなければならない。

12-2-5 どちらのジャンパーも、ボールが正当にタップされる前にそのポジション（位置）を離れてはならない。

12-2-6 どちらのジャンパーも、ジャンパー以外のプレーヤーかフロアにボールが触れるまで、ボールをキャッチしてはならないし、2回までしかタップすることはできない。

12-2-7 ボールがどちらのジャンパーにもタップされなかった場合は、ジャンプボールはやり直しになる。(中略)⁽⁷⁾

バスケットボールもまた、サッカー同様に現在はボールの争奪に極めて大きな比重が置かれているため、現在ではこのジャンプボールの場面以外でサーブの要素を見出すことは困難である。

しかし、文中にある審判がボールをトスするという行為に、サーブ行為の要素を見出せるのは事実である。他の方法でどちらかのチームからパスをつないでプレーを開始することも十分に可能であり、あえて第三者にボールをあげさせたところから争奪が開始される構図は、進化と合理化を求め続けるバスケットボールという種目がたとえ一瞬の時間でもこうした要素をプレーの中に、しかもその始めの部分に残していることは極めて興味深い事象である。

ネイスミス思想にも、また現在のNBAの見解にもその思想や根拠は明文化して示されておらず、今後の課題である。

6.1.4 ハンドボール スローオフ

ハンドボールは発祥以来のその歴史において、召使いや下級身分の存在も、またそれらによるサービス（球出し）も存在せず、スローオフと呼ばれる味方同士のパスからプレーが開始される。ゴール型球技の攻防の開始としては最も合理的な型といえよう。

ハンドボール自体はヨーロッパで生まれた種目であるが、同じ身分同士で競い合うことが原初の段階から定着していたためか、プレーの最初に、イギリスに多く見られたような貴族趣味的な他者に球を出させる光景は存在していない。

(7) JBA規約

6.2 ベースボール型球技

6.2.1 クリケット

現在、ベースボール型球技の代表格はもちろんベースボールであり、日本では野球の名称で熱狂的に愛好されている。

しかし歴史的に見ればクリケットがベースボール型球技の先駆けであることは疑いを容れない。

クリケットはプレーの構造が野球とかなり相似しており、投手の投げたボールを木製の棒でインフィールドに打ち返す点に関して言えばほぼ同一の技術応酬である。

そしてこの投球は元来、召使いや労働者階級のものが貴族の打撃に面白みや爽快さを与える目的でなされた。したがって投球はまさしくサービスそのものであり、現在のベースボールと比較した場合、攻撃側のアドバンテージが高く、攻撃時間そのものもかなり長い。そして守備側が攻撃側を抑える方法も野球に比べれば困難である。

6.2.2 ベースボール

ベースボールは日本では野球として根強く定着しており、国民的スポーツの名の下に認知されている。

この種目では前述のクリケット同様に、投手による投球を打者がインフィールドに打ち返し、ベースを一周回ることによって得点が入る。

プレーの端緒は投手の投げるボールから始まるが、もはや速球や変化球等、守備側にも攻撃側を翻弄しアウトを取れるだけの技術もルールも整備されているため、サーブのような球の打ち出しや投げ入れは見られなくなっている。

ティーバッティングなどの練習法やスローピッチなどで形を変えたサービスの萌芽あるいは残影を認めることもできるが、これに関してはゴルフの扱いをベースボール型に含めることが妥当かという問題も含めて稿を改めたい。

結語

サーブという名の、または同様の意味合いを持つ技術は非常に多くの種目に存在し、それは必ずしもテニスと似た形式のネット型スポーツ種目だけではないということが判明した。

そしてそのサーブは、名を残しながらも実際にはかなり攻撃性の強い技術に変貌しつつある。勝敗のカギを握る重要な位置付けを得るに至ったのである。この原因は、さらなる面白さを求めて、興奮できる内容のプレースタイルが求められ、競技化が促進されるにあたって第一打目の重要性に変化が起きたと考えられる。

今回は内容の区切りの都合上途中で打ち切る形になったゴルフの第一打目、ティーショットがサーブに類するものであるかどうかの考察をしなければならないと考えている。

引用・参考文献

金子明友著 運動学講義 大修館書店

岸野雄三著 現代保健体育学大系 体育史 大修館書店

岸野雄三著 体育史講義 大修館書店

中村敏男 高橋健夫 寒川恒夫 友添秀則 編著 スポーツ大事典 大修館書店
文部科学省 学習指導要領
公益財団法人 日本バスケットボール協会 JBA Official BASKET BALL RULES 2018
<http://www.japanbasketball.jp/files/referee/rule/2018rule.pdf>
公益財団法人日本ハンドボール協会 ハンドボール競技規則
https://www.handball.or.jp/rule/doc/2017competition_rule.pdf
IFAB 国際サッカー競技連盟 laws of game
http://www.jfa.jp/documents/pdf/soccer/lawsofthegame_201819.pdf
NFL 公式サイト日本語版 <https://nfljapan.com/guide/rule>
拙著 ゴール型球技における構造論に基づく哲学的一考察
科学/人間 No.47 関東学院大学理工学部 建築・環境学部 教養学会